＜前回＞個人主義か実存か―キルケゴール

（１）キルケゴールの思想的特徴

①宗教批判者としてのキルケゴール(1813-1855)
　真のキリスト教と、近代市民社会において堕落したキリスト教　→　バルト
②反ヘーゲル主義　→　実存主義の先駆者
　　真理：客観性としての真理／主体性としての真理
　　体系：論理学の体系は可能である（諸イデアの相互関係）／しかし、歴史的な現実存在（＝実存）に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である
　　同時代性と同時性：信仰はキリストと信仰者とが同時性に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。
③仮名と実名の二種類の著作　→思想の表現形式、レトリックに注目
　仮名の意味：1. 小説あるいはフィクション性→著作自体に注意を集中（詩的機能）
　　2. 一人の思想家の思想が、複数の仮名へと分散する。思想の断片性

（２）キルケゴールの宗教批判――現代批判と市民社会のキリスト教

２.「コルサール事件」(1846 年)、週刊新聞『コルサール』(ゴシップ暴露)
３．キルケゴールの現代批判（『文学評論』の第２章）
　・革命の時代と分別の時代（反省の時代、情熱のない時代）
　　水平化と外面性　→　新聞などのマスコミと世論・公衆といったもの
　・宗教的信仰：個々人の救いの問題、個人ひとりひとりの事柄
　　宗教者にとってきびしい試練、修養　→　「良き戦い」として人生（天路歴程）
　・沈黙、無関心を装った教会　→　非人間的大衆化社会を批判し真のキリスト教を守るべき使命をもつ教会（戦闘の教会、ecclesia militans）という任務の放棄

（３）単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、――かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、神の前にただひとりで立つことである」　→　単独者　→　ルターの信仰
①人間論の伝統：人間を統合と捉える議論、デカルトにおける、心（思惟）と身体（延長）という二つの実体の合成としての人間。両極性における人間存在の分析。
②人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在
　　自己反省、自己参照性、自己関係：「……「「「自己」に関係する関係」に関係する関係」……」　→　無限に多重化する存在者である（生成過程における自己）
③自己＝生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者　→　本来的な自己になるという課題
④関係存在としての自己の存在根拠
　　１．人間は自己自身の中にその存在根拠を有する　→　自己組織化
　　始まりの問題（宇宙の始まりのその前）と無限遡及のパラドックス
　　２．関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場
⑤人間＝自己関係的存在→自己になる課題→不安と絶望の可能性

（４）実存弁証法と真のキリスト者への道

４.「美的段階　→　倫理的段階　→　宗教性Ａ　→　宗教性Ｂ」：精神の発展プロセス

（５）キルケゴールの自己論

（６）キルケゴールの問題性

12. キルケゴールとマルクス、ニーチェ
・キルケゴールとマルクスとを関係づける必要性。

13．個人と社会・共同体との関係。

個人の主体性の強調→単なる抽象論、大衆の蔑視→エリート主義あるいは単なる変わり者。「現実に対する保守的態度」（武藤、39）、「実存主義とラディカルな社会倫理の結合こそ、現代の課題であることを信ずるものである」（40）、「実存の現実化ないしは実存哲学と歴史哲学との結合という現代哲学の課題」（42）

（7）近代と制度的自己再帰性――ギデンズ

15．ギデンズの近代社会論における「再帰性」（reflexivity）概念――「A についての言及が、A 自体に影響を与えること」――。

16．人間存在の基本構造

→　近代特有の現実性としての「制度的再帰性」（the institutional reflexivity）

人間存在の基本構造の近代特有の特殊的現実化・形態化。

つまり、再帰性が社会制度として存在すること、ここに近代的システム特有の問題が認められる。

17．制度的再帰性の具体的形態としてのが近代的知。

近代的知の特性は、「モダニティでは根本的懐疑の原理が制度化されており、そこではすべての知識は仮説のかたちを取らざるをえない」（Giddens, 1991, 3）という点に現れている。

22．近代の制度的再帰性の帰結：

懐疑という再帰的営みを制度化することにより（懐疑の制度）

→　既存の「確実な知」を解体。

伝統的な宗教的な権威（聖書や伝統、そして啓示）も例外ではない。

→　近代聖書学の成立は、この懐疑の制度化を象徴する出来事。

近代のキリスト教神学では、方法論や知の基盤をめぐる議論（体系のプロレゴメナ）に多くの努力が傾けられることになる。

23．制度的再帰性としてのモダニティの自己修正・自己拡張的な動態。

再帰的に自らのシステムに関わることによってその欠陥や不十分さを修正しつつ、無限に自らを拡張してゆく（システムの自己修正と内部準拠性 によるシステムへの繰り込み――近代・モダニティは再帰的な未完のプロセスであり、モダニティから、それ以降は生じない。ポスト・モダンという逆説――）。

↓

社会システムの外部の問いは内部へと繰り込まれ、「外部」という仕方では存立し得ないことになる（自然主義・歴史主義）。

近代的な知の営みにおいては、「神」でさえも、たとえば、人間の類的本性の投影として、社会システム内部で処理される。

25．モダニティは伝統的宗教を解体するとしても、人間存在の可能性としての宗教性までをも排除することはできない――モダニティも宗教・祈りも再帰性を共有している――。

＝ギデンズの言う「抑圧されたものの回帰」という問題。

再帰性によって成立するシステムも、そのシステムの根拠づけ・正当化の問いを免れることができない。内部に繰り込まれ抑圧されたかに見える外部の問いは、システムのコントロール不可能な変動（いわゆる限界状況、戦争や革命、そして死）において、繰り返し舞い戻ってくる。

↓

制度的再帰性を特性とするモダニティも、システムの外部の問いにさらされるという危険（可能性）を除去することはできない。安心・予測（＝未来の植民地化）を目ざし進展してきた再帰的なコントロール自体が、さらに大きな不安定要因となるのであって、コントロールできないリスクの存在はモダニティへの正当性への問いを繰り返し提起し続ける。

13. トレルチとヨーロッパ主義

・トレルチ（Ernst Troeltsch,1865-1923）。

ドイツのプロテスタント神学者、宗教哲学者。1892 年からボン大学、1894 年からハイデルベルク大学で組織神学の教授。1915 年からはベルリン大学で哲学の教授。

Troeltsch was born in Augsburg, Germany, and he taught at the Universities of Göttingen, Bonn, Heiderberg and Berlin. He also served for a time in the Ministry of Education. He is remembered for his *Die Absoluteheit des Christentums*, his *Der Historismus und seine Problem* and his *Die Sociallehren der Christlichen Kirchen und Gruppen*. Influenced by Albrecht Ritschl and also by the neo-Kantians, he maintained that religious claims must be understaood relative to their cultural contexts. He also is remembered in his sociological work for making the classic distinction between Church and Sect. He was highly influential on later thinkers such as Baron von Hügel.

R.H. Bainton, 'Ernst Troeltsch--thirty years after', *Theology Today*, vii (1950); S.Coakley, *Christ Without Absolutes: A Study of the Christology of Ernst Troeltsch* (1988) ; B.A.Reist, *Towards a Theology of Involvement* (1966).

（Lavinia Cohn-Sherbok, *Who's Who in Christianity*, Routledge, 1998, p.297.）

（1）リッチュル学派からの離脱

１．リッチュル批判

・「A・リッチュルから学んだこと」:「教義的伝承の判明な把握」「近代の精神的宗教的状況の同様に判明な把握」（森田、219）

↓

２．基本的課題「近代世界をいっそう率直に検討することによってキリスト教的理念世界を徹底的に思惟し、明確に系統的に述べること」

「キリスト教的理念と近代世界との関係が倫理的次元の問題に深く根ざしていることを見いだした」（219）

「実践としての倫理的領域のなかでも、とりわけ社会倫理の領域において、トレルチは教義的伝承と近代世界との対立葛藤が現われることを看取する」、「社会集団の宗教的実践として理解され答えられるべきである」（220）

３．『社会教説』（Die Soziallehren der christliche Kirchen und Gruppen, 1912）

・社会教説：国家、経済、家族、社会などをめぐる諸教説

・キリスト教共同体の類型（理念型）：教会（Kirche）、分派（Sekte）、神秘主義（Mystik）

４．「キリスト教の本質」とはいかなる問題か。

cf. ハルナック（『キリスト教の本質』）とその『教理史』

原始キリスト教とその変質（ヘレニズム化）

『＜キリスト教の本質＞とは何か』（1903）。歴史的複合現象（Komplexerscheinung）としてのキリスト教→全体の総括的展望＋個別的な事象の厳密な把握

批判としての本質、発展としての本質、理想としての本質（本質規定とは本質形成である）。

「本質とは直観的な抽象であり、宗教的・倫理的な批判であり、活動的な発展概念であり、そして未来を形成し新たに結ぶ仕事を据える理想なのである。」（２，98）

５．近代プロテスタンティズムの二段階説（リッチュル学派との相違）

古プロテスタンティズム（Altprotestantismus）：宗教改革と 16、17 世紀のプロテスタンティズム、いまだ中世的である。自然法的権威主義的な文化。

新プロテスタンティズム（Neuprotestantismus）：啓蒙主義以降の厳密な意味での近代世界。個人的自律の文化（個人主義的傾向を帯びた多元的文化）。統一的文化は未

だ未成立。

（２）宗教史学派の神学

６．近代以降の神学の方法論的反省。シュライアマハー（Dogmatik から Glaubenslehre へ）からリッチュルへ至る展開過程の線上。

「神学における教義学的方法と歴史学的方法について」(Über historische und dogmatische Methode in der Theologie, 1900)

「教会的神学から自由な宗教哲学に正しく基礎づけられたキリスト教神学」、「教会的伝統から全く自由な立場において近代的学問意識において正しく位置づけられた神学」の構想（佐藤、169）

「伝統的な教義学から決定的に彼を決別させたものは、近代的歴史意識とそれに伴う歴史学である」(169)

７．歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義

・批判（Kritik）・類推（Analogie）・相互作用（Wechselwirkung）あるいは相関（Korrelation）

「キリスト教をも含む宗教史全体の包括的連関の中にキリスト教は置かれねばならず、キリスト教に関する評価も全体的連関からなされねばならない」(171)

→　方法論的現在中心主義

８．「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)

・二つの研究方向

1) キリスト教の純粋に歴史的な研究

2) それに基づいたキリスト教の妥当性

・教義学の 4 つの課題

1) 諸宗教との比較を通したキリスト教の最高の妥当性の証明

2) キリスト教（歴史的連関において成立し様々な要素を摂取し発展してきた歴史的複合体）の本質が何を意味するか。

3) キリスト教の本質の叙述（＝狭義の教義学）

神、世界、人間、神の国、永生などの諸表象を含む

4) 教義学は学問的知識や方法を前提とするが、それ自体は、一種の信仰告白であり、説教や宗教教育の手引きである。実践に関わる。それ自体は近代的な学問ではない。

↓

伝統的な教義学の解体、『信仰論』

（３）カント的な宗教哲学の構想

９．心理学と認識論　→　カントの批判哲学による解決

経験から経験のア・プリオリな条件へ、実証主義的宗教心理学への批判

「心理学的なものの中に含まれる理性が自己の活動を通じて自己自身を認識するという仕方で」「認識論的な循環」→「無限に繰り返されるべき課題」（177）

「ア・プリオリな基本概念」は「不断に成長」「自己修正的」

10．カント主義の拡張　cf. 波多野

認識論のみがアプリオリではない。精神活動の諸領域のアプリオリな構造。

宗教的アプリオリ、この宗教的アプリオリが現実化する（心的現象）

↓　　cf. ユングの元型（林道義）

11．トレルチの体系構想と宗教研究の位置：４つの学的テーマ

・宗教現象の心理学的認識を可能にする普遍概念・類概念（宗教心理学）

・宗教の真理内容（宗教認識論）、事実に対する価値、宗教的アプリオリ

・歴史上の諸宗教の段階的な評価、宗教の理想への適用、歴史を貫いて遂行される真理内容の内的運動（宗教の歴史哲学）
・生全体の中での意味、最も普遍的で原理的な世界知と宗教の主張する実在（神）との関係（宗教の形而上学）。ライプニッツ的。

（４）歴史主義の諸問題

12．歴史主義と歴史相対主義
近代＝実在・現実の歴史化（大木英夫『新しい共同体の倫理 〈基礎編 上下〉』教文館）
歴史の多義性
↓
13．キリスト教の絶対性（普遍史）からヨーロッパ的文化総合へ
・1902: Die Absolutheit des Christentums und die Religionsgeschite
「救済宗教」「キリスト教は人格主義的な宗教性の最も強力で集中的な啓示」(199)
↓
・1922: Der Historismus und Seine Probleme、「ヨーロッパ主義」（Der Europäsimus）
14.『歴史主義とその諸問題　下』(『トレルチ著作集６』)
「第四章　ヨーロッパ文化史の再建について」
１　発展の建設　２　ヨーロッパ主義　３　客観的時代区分の問題
４　建設の成層

「人はエンテレケイアとして完成」「エンテレケイアがどのように生成するのか、また生成してきたのか、そして各々の現在からさらに未来へと向かって形成されていくのかを取り扱うのは、歴史学であり、歴史学はもっぱらそれを扱うのである。いずれにせよこれが、ヨーロッパ文化（Europäertum）の決定的で特徴的な信仰である。」(348)

「普遍史をヨーロッパ文化に限定することを完全に合致している」、「近代の西洋世界と古代的・中世的な世界とを再び密接に結合させる結果になる。事実、これら両方の巨大な文化世界は、分かちがたく結合した形でヨーロッパ主義（Europäismus）を形作っており、さらに、ヨーロッパ主義がアングロサクソン的ならびにラテン的な巨大な植民地運動によって地球の大部分に拡張されてきた今日でも、なおこのヨーロッパ主義を規定している。このヨーロッパ主義だけが、現実的因果連関、広く行きわたった本質的な、しかも同時に文献に基づいて洞見し、統御し得る連関を形作っている。われわれがわれわれ自身の実存を担っている歴史的連関全体の意味を問う時、このヨーロッパ主義は、あらゆる相違を含みながら、しかも同時に、それだけで一つの意味統一をなしている。これが、これまでのさまざまな研究や吟味によるおおむね一般的な帰結であり、また繰り返し姿を表わす結論である。」(348-349)

「重大で興味深い」「文化圏」、「近東アジアの文化圏であって結局はイスラエル文化に集合していく文化圏、エジプト文化圏、インド文化圏、中国文化圏、そして最後に地中海・ヨーロッパ・アメリカ文化圏」、「こうしたいくつかの文化圏にのみ、そのつどまったく固有で独特な意味を持った統一的な文化的成果が存在した。」(354)

cf. シュペングラー、トインビー、ブローデル『地中海』（藤原書店）

「われわれにとって存在するのは、ただ、ヨーロッパ文化の普遍史のみである。このヨーロッパ文化の普遍史は、自分自身を理解し、また他の文化に対する自己の関係を理解するために、当然、実践的にも理論的にも異質な諸文化に対して、それらを比較考察する目を向けることを必要としている。しかしこの普遍史は、そのことによって他の文化の歴史といっしょになって、たとえば一般的な人類史や人類の発展の中に合流していくことはできない。・・・われわれの普遍史はヨーロッパ的な自己理解なのである。」(357)

「このヨーロッパ主義の普遍史の範囲に関してはあいまいなものが残っている。」(379)

「イスラム」
「ロシアとヨーロッパ主義との関連づけ」(382)
「アメリカ」「ここにも未来に対して開かれた一つの場所がある。」「アメリカ主義」(385)
ときになっているうる胃を結どうした」

15. Q：
1)歴史相対主義はニヒリズムか？　cf. H.R.ニーバー（『啓示の意味』)、パネンベルク
2)普遍性とは何か？　普遍性と個別性とは単純に対立的か？　歴史内部で可能な普遍とは？
3)ヨーロッパ主義は現代も妥当か？　EU とは何か？

＜参考文献＞

０.『歴史主義とその克服』理想社、1956 年。
『ルネサンスと宗教改革』岩波文庫、1959 年。
『トレルチ著作集』全 10 巻、ヨルダン社、1980-88 年。
1　宗教哲学　2　神学の方法　3　キリスト教倫理　4・5・6　歴史主義とその諸問題　7　キリスト教と社会思想　8・9　プロテスタンティズムと近代世界
10　近代精神の本質
『私の著書』創元社、1982 年。　『信仰論』教文館、1997 年。
『古代キリスト教の社会教説』教文館、1999 年～。
１．武藤一雄『神学と宗教哲学の間』創文社、1961 年。
２．熊野義考「トレルチ」(『歴史と現代　上』全集 10 巻、新教出版社、1981 年)。
３．佐藤敏夫『近代の神学』新教出版社、1964 年。
４．森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年。
５．大林浩『トレルチと現代神学』日本基督教団出版局、1972年、『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局、1981年。
６．柳父圀近『ウェーバーとトレルチ―宗教と支配についての試論―』みすず書房、1983年。
７．安酸敏眞　*Ernst Troeltsch. Systematic Theologian of Radical Historicality*, Atlanta: Scholars Press, 1986.、『歴史と探求――レッシング・トレルチ・ニーバー』聖学院大学出版会、2001 年。
８. H.E.テート『ハイデルベルクにおけるウェーバーとトレルチ』創文社、1988 年(1985)。
９．近藤勝彦『トレルチ研究』上下、教文館、1996 年。
10．佐藤真一『トレルチとその時代』創文社、1997 年。
11. F.W.グラーフ『ヴェーバー・トレルチ・イェリネック――ハイデルベルクにおけるアングルサクソン研究の伝統』、『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』聖学院大学出版会、2001 年。
12．Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften.* 1-4, Scientia Verlag.
13．Ernst Troeltsch, *Kritische Gesamtausgabe*, Walter de Gruyter.
14．Ernst-Troeltsch-Gesellschaft：http://www.st.evtheol.uni-muenchen.de/troeltsch/index.html